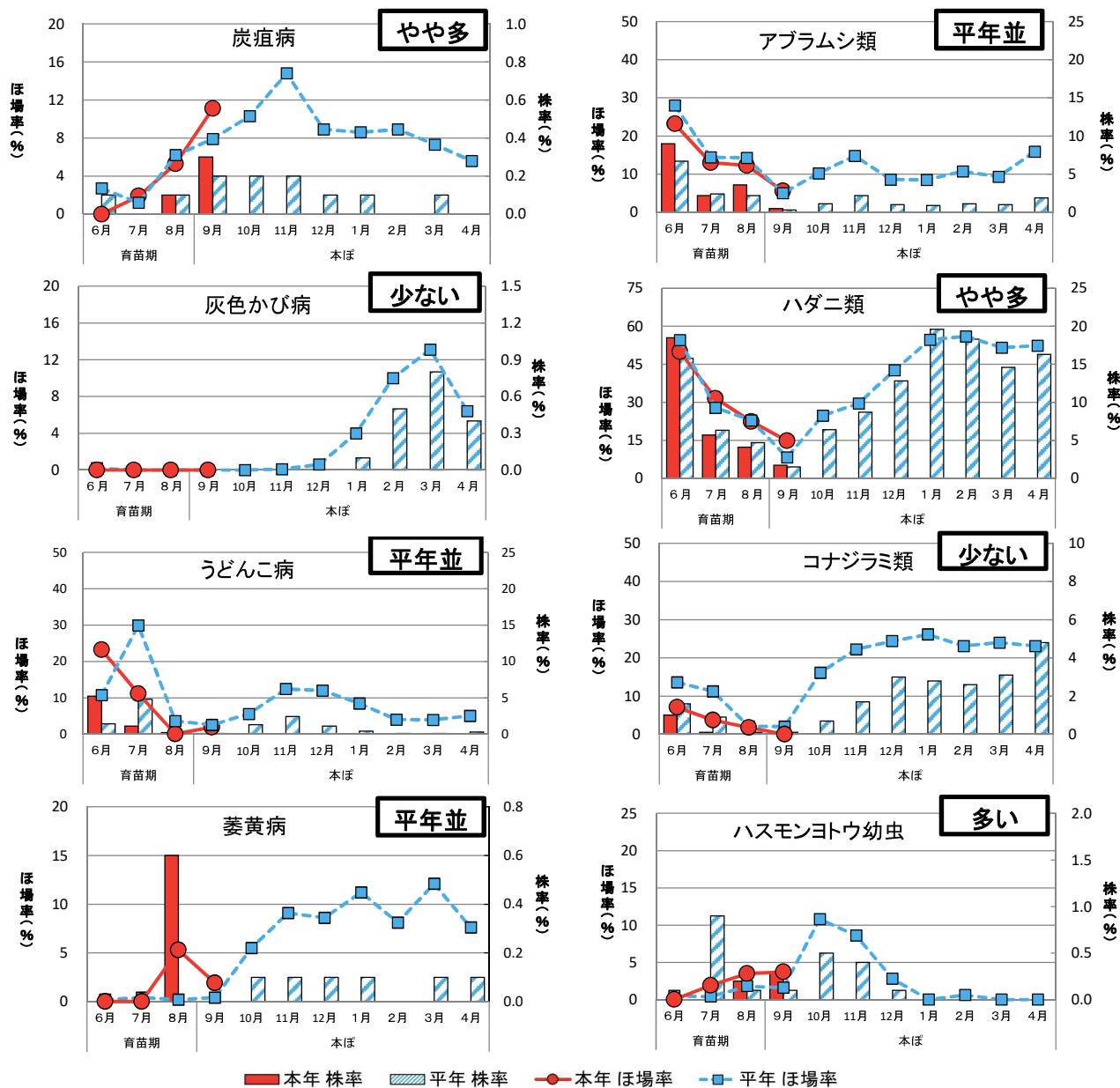


いちご病害虫情報第4号（9月）

令和7（2025）年9月19日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：54 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

一 ハスモンヨトウの対策 一

ハスモンヨトウの発生が多いため、防除対策を徹底しましょう。

- 1 定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。施設のパイプ、ネット等の資材にも産卵するため、それらも注意して観察する。
- 2 施設開口部に4mm目合以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
- 3 ほ場内外の雑草は発生源になるため、除草を徹底する。
- 4 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

■ 今月のトピックス アザミウマ類

主要な種類

アザミウマ類はいちご栽培で重要な害虫です。県内のいちごで最も主要な種はヒラズハナアザミウマ（写真1）です。ミカンキイロアザミウマ（写真2）やハナアザミウマ（写真3）等も発生します。いずれの種も体長は1～2mmで、現場での種の識別は困難です。

アザミウマ類の発生は、花の観察の他、白い紙等の上で花を軽く叩く方法でも確認できます。アザミウマ類が発生していれば、花を叩くと細長く褐色または淡黄色の小さな虫が紙の上に落ちます。



写真1 ヒラズハナアザミウマ

写真2 ミカンキイロアザミウマ

写真3 ハナアザミウマ

生態と被害

アザミウマ類は花や果実に寄生します（写真4）。幼虫に加害されると果実肥大後にそう果（種に見える部分）の周囲を残して表面が褐変し、商品価値が低下します（写真5）。

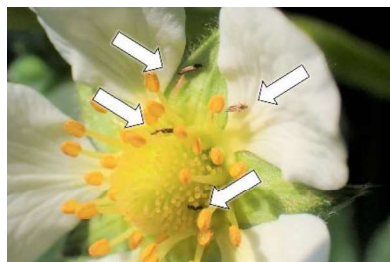


写真4 花上の成虫



写真5 果実の被害

防除対策

- 野外のアザミウマ類は10月末まで活発に動き回るため、それまでに開花が進んだほ場は侵入されやすい傾向にあります。発生源をなくすため、ほ場内外の除草を徹底しましょう。
- 冬季の発生や被害は、秋にほ場に侵入した個体に由来します。ほ場をよく観察し、11月以降の薬剤防除等により、翌春までの密度を抑制しましょう。なお、天敵を利用する際には、天敵に影響の少ない薬剤を選択しましょう。
- 特に、秋に被害が発生したほ場では、翌春の被害の発生も早いため、2月頃から早期発見・早期防除に努めましょう。
- 詳しい防除対策は[防除のポイント No. 19](#)を、薬剤の選定には[いちごときくに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果](#)、[続報](#)を御確認ください。

詳しくは農業総合研究センター環境技術指導部防除課までお問合せください（Tel 028-665-1244）。

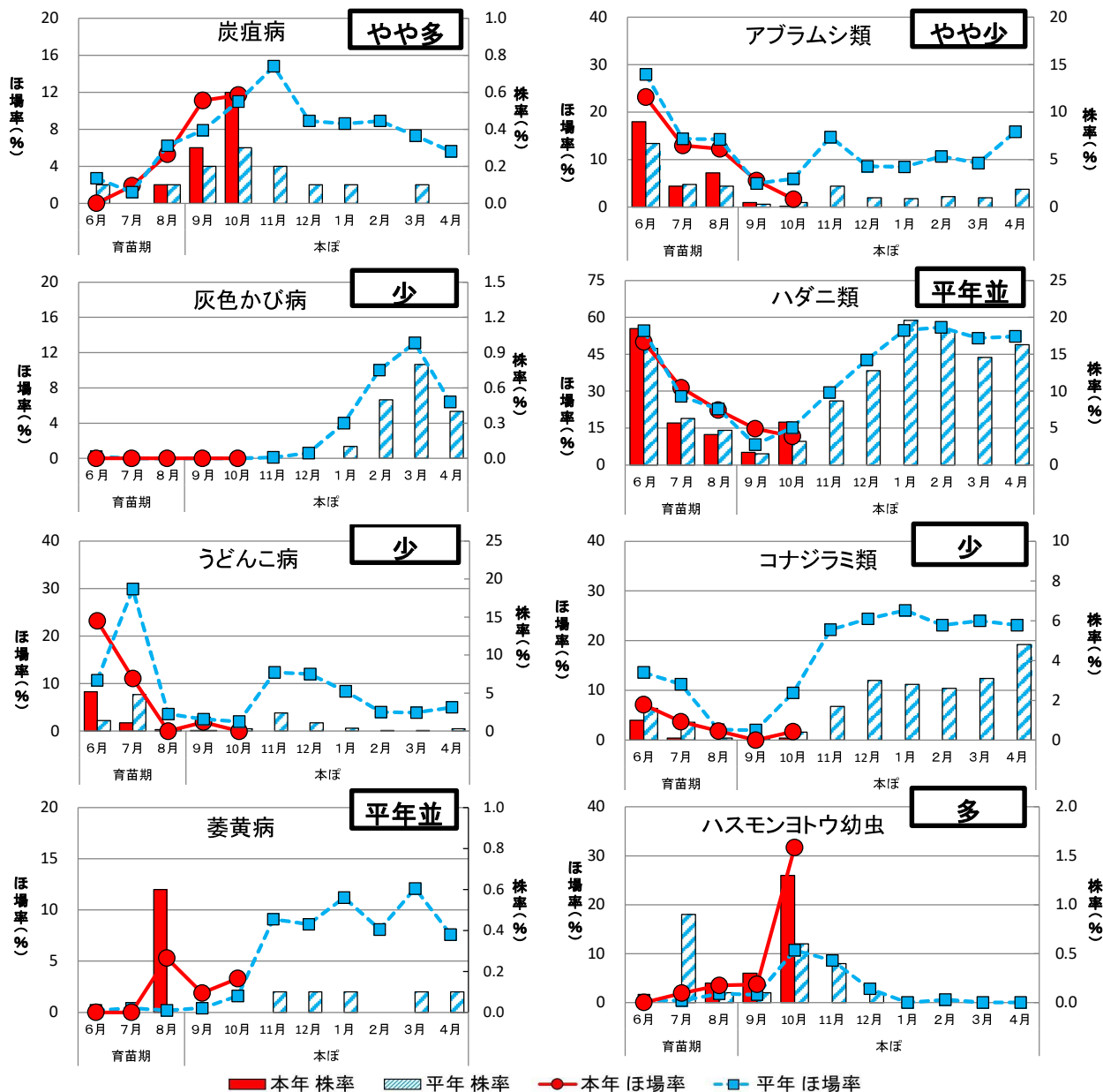
病害虫情報発表のお知らせはX「[栃木県農政部](#)」、[「農業総合研究センターホームページ」](#)でもご覧いただけます。



いちご病害虫情報第5号 (10月)

令和7(2025)年10月17日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：63 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%) : 発生株数 / 調査ほ場数 × 25株 ※ほ場率(%) : 発生が確認されたほ場数 / 調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー アザミウマ類の防除対策 ー

野外のアザミウマ類は、11月頃まで活発に活動します。10月中旬までに開花が進んだほ場では、野外からのアザミウマ類の侵入が多くなる傾向があります。冬季の発生は、ハウス内に残存した個体に由来するため、ほ場をよく観察し、適切な防除を行いましょう。

- 1 ハウス内外の除草を行い、ハウス内に不要な植物を置かない。
- 2 花をよく観察し、1割以上にアザミウマ類が確認された場合は、薬剤防除を実施する。なお、薬剤はミツバチ等の花粉媒介昆虫や天敵への影響日数に注意してする。
- 3 薬剤感受性の低下を防ぐために、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

■ 今月のトピックス ハダニ類

ハダニ類（写真1）は、県内の促成栽培いちごにおいて、親株から栽培終了時まで周年で発生し、多発すると株の生育不良や果実の品質低下などの被害が生じます。

ハダニ類は化学農薬に対する感受性が低下しやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布することが重要です。

天敵製剤（写真2）や気門封鎖剤は、薬剤感受性が低下したハダニ類にも有効であり、化学農薬の散布回数を大幅に減らすことができるため、積極的に活用しましょう。

天敵製剤(カブリダニ類)の使用にあたって

- 天敵製剤はハダニ類の発生前から発生初期に放飼すること。
- ハダニ類の発生が多い場合は、放飼前に気門封鎖剤や天敵に影響の少ない薬剤を使用し、ハダニ類の密度を下げる。
- 放飼後はハウス内をこまめに見回り、天敵が定着・増殖していることを確認する。

気門封鎖剤(物理的防除剤)の使用にあたって

- 気門封鎖剤は、ハダニ類に直接かからなければ効果が得られないため、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- 多くの気門封鎖剤には殺卵効果が無いため、卵から孵化した幼虫・成虫に対して5～7日程度の間隔で複数回散布する必要がある。



写真1 ナミハダニ雌成虫(いちごでの主要種)
(被害葉はカスリ状の斑点がみられる)



写真2 チリカブリダニ成虫(ハダニ類の天敵)
(光沢のあるしずく形：約0.5mm)

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課
(Tel 028-665-1244) までお問合せください。

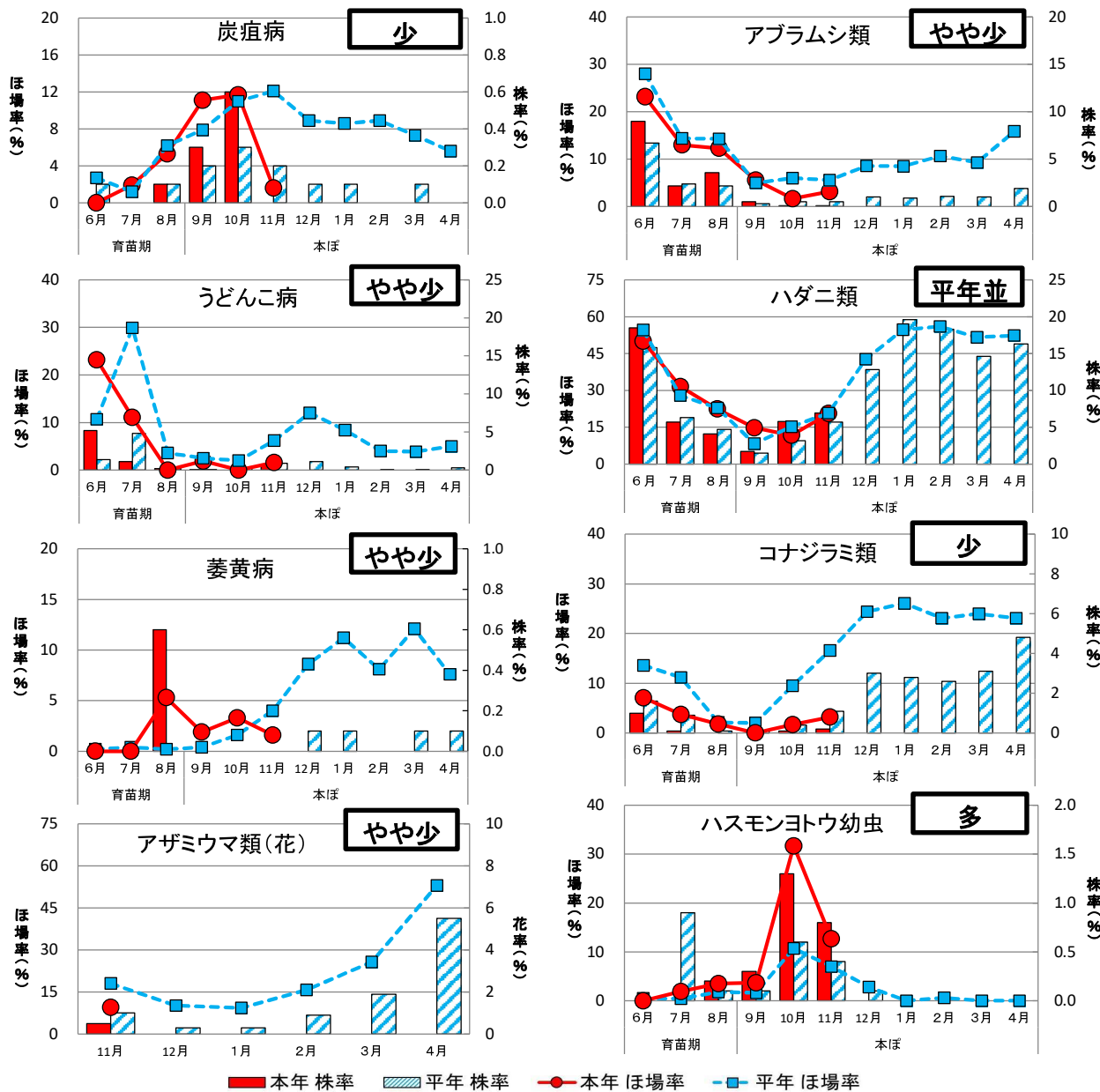
病虫害情報発表のお知らせはX「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。



いちご病害虫情報第6号 (11月)

令和7(2025)年11月21日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：63 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%):発生株数/調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%):発生が確認されたほ場数/調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー ハダニ類の防除対策 ー

収穫が本格化する前に、早めの防除対策で被害を防止しましょう。ハダニ類は化学農薬に対する感受性が低下しやすいため、化学農薬に頼らない防除対策（天敵製剤や気門封鎖剤）を積極的に活用しましょう。

- 1 ほ場をこまめに観察し、早期発見、早期防除に努める。
- 2 天敵製剤や気門封鎖剤を活用する。天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいため、導入前に天敵に影響の小さい薬剤でハダニ類の密度を低下させる。
- 3 薬剤感受性の低下を防ぐため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

■ 今月のトピックス アザミウマ類

主要な種類

アザミウマ類はいちご栽培で重要な害虫です。県内のいちごで最も主要な種はヒラズハナアザミウマ（写真1）ですが、その他の種（写真2, 3）も発生します。いずれの種も体長は1～2mmであり、現場での識別は困難です。

アザミウマ類の発生は、花の観察の他、白い紙等の上で花を軽く叩く方法でも確認できます。アザミウマ類が発生していれば、花を叩くと細長く褐色または淡黄色の小さな虫が紙の上に落ちます。



写真1 ヒラズハナアザミウマ



写真2 ハナアザミウマ



写真3 ミカンキイロアザミウマ

生態と被害

アザミウマ類は花や果実に寄生します（写真4）。幼虫に加害されると果実肥大後にそう果（種に見える部分）の周囲を残して表面が褐変し、商品価値が低下します（写真5、6）。

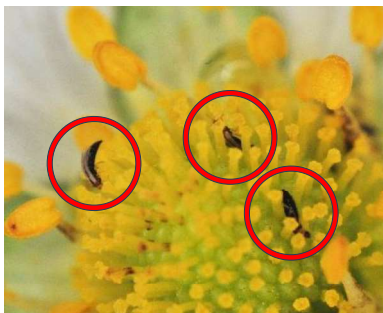


写真4 花上のアザミウマ類



写真5 アザミウマ類により加害された果実



防除対策

秋のハウス外からの侵入は開花から11月頃までであり、その後の冬季の発生はハウス内の残存個体に由来します。年明けから春先にかけて再び増殖を開始するため、年明けの防除を徹底しましょう。

- 1 花をよく観察し、早期発見、早期防除に努める。1割以上の花にアザミウマ類が確認された場合は、速やかに薬剤防除を実施する。薬剤感受性の低下を防ぐため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。天敵を導入する場合は、天敵への影響に注意して使用する。
- 2 天敵製剤や気門封鎖剤を活用する。天敵導入時にアザミウマ類が多いと失敗しやすいため、導入前に天敵に影響の小さい薬剤でアザミウマ類の密度を低下させる。
- 3 詳しい防除対策は[防除のポイント No. 19](#)を、薬剤の選定には[いちごときくに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果、続報](#)を参照。

詳しくは農業総合研究センター環境技術指導部防除課までお問合せください（Tel 028-665-1244）。

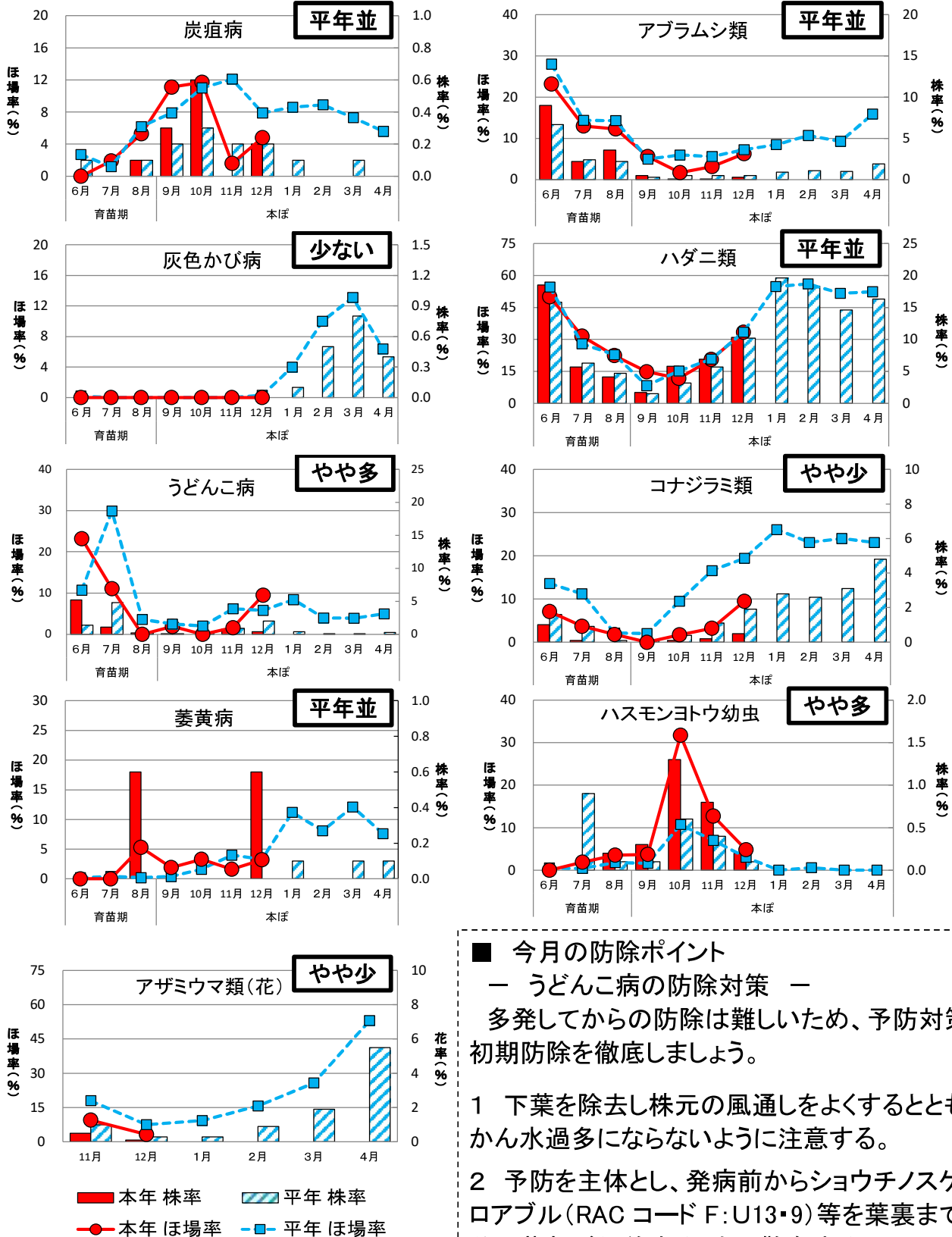
病害虫情報発表のお知らせはX「[栃木県農政部](#)」、「[農業総合研究センターホームページ](#)」でもご覧いただけます。



いちご病害虫情報第7号 (12月)

令和7(2025)年12月19日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数 63 か所】



※ほ場あたり25株調査
※株率(%):発生株数/調査ほ場数×25株
※ほ場率(%):発生が確認されたほ場数/調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

— うどんこ病の防除対策 —

多発してからの防除は難しいため、予防対策と初期防除を徹底しましょう。

- 1 下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
- 2 予防を主体とし、発病前からショウチノスケフロアブル(RACコード F:U13・9)等を葉裏まで十分に薬剤が付着するように散布する。
- 3 紫外線(UV-B)の照射は、本病の発生抑制に効果的である。

■ 今月のトピックス 灰色かび病

被害症状について

主に果実に発生し、がく、果梗、葉、葉柄など地上部のあらゆる組織を侵します（写真1～3）。はじめ淡褐色の病斑を生じ、急速に拡大して果実を軟化腐敗させ、表面に灰色粉状のカビを密生します。病斑上に形成される分生子（写真4）が飛散して、空気伝染し、蔓延します。

本病は、気温が20℃前後で湿度が高い場合に発生しやすく、施設内の多湿、朝夕の冷えこみによる植物体の結露が発生を助長します。また、例年1月頃から発生し始め、3月に最も発生が多くなる傾向があるため、日頃からほ場内をよく観察し、発生を見逃さないように注意しましょう。

防除対策について

- 多湿条件で発生しやすいので、下葉を除去し株元や果房の風通しをよくする。
- かん水過多に注意する。
- ハウス内が多湿にならないように換気に努める。
- 発病した果実や果梗、枯死した部位は伝染源となるので、ほ場を良く観察し、見つけたら速やかに取り除き、施設外で処分する。
- とちあいかの栽培において、芽数を多く残すと内側に伸びやすいため、花房を外側に向け、果実が取り残されないように注意する。
- 薬剤耐性菌が発生しやすいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。薬剤選定の際には、[薬剤感受性検定結果](#)を参照する。

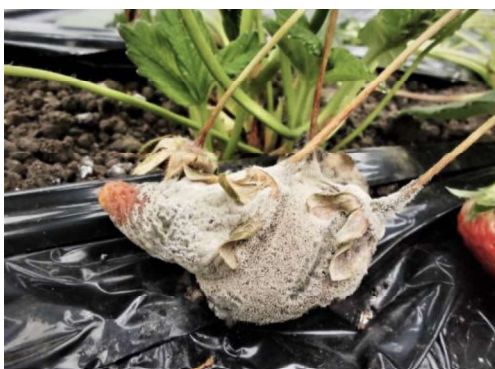


写真1 果実・がくの症状

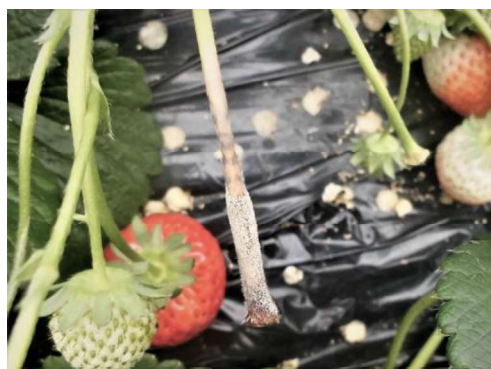


写真2 果梗の症状



写真3 葉柄基部の症状

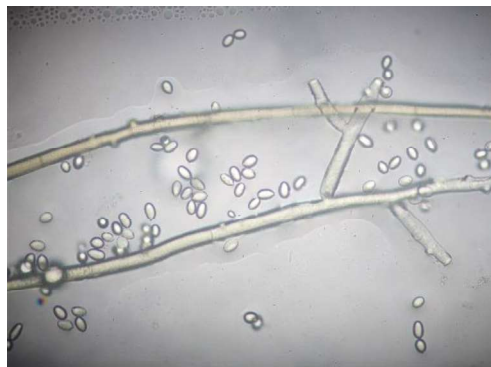


写真4 分生子

詳細は、環境技術指導部防除課（Tel028-665-1244）までお問合せ下さい。病害虫情報発表のお知らせは「[農業総合研究センターホームページ](#)」、「[栃木県農政部 X](#)」でご覧いただけます。





令和7（2025）年度 病害虫発生予察注意報 第1号

令和7（2025）年5月20日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

作物名：小麦、六条大麦

病害虫名：赤かび病

1 発生予想 発生量 **多い**

2 発生地域 **県内全域**

3 注意報発表の根拠

- (1) 5月中旬の小麦・六条大麦の赤かび病発生ほ場率は、87.0%（平年値 42.6%）、発生穂率は、2.5%（平年値 1.0%）で、いずれも過去5年間では2番目に高かった（図）。
- (2) 麦種別の発生ほ場率は、小麦（80.0%）、六条大麦（100%）であった。
- (3) 宇都宮市における5月1日～19日の赤かび病の子のう胞子が飛散しやすい好適日*は15日間で、赤かび病が多発した昨年（11日間）より多かった（表1）。
- (4) 気象庁の1か月予報（5月15日発表）は気温が高く降水量が多いとされており、今後さらに発生の増加が懸念される。

*赤かび病の子のう胞子飛散好適日：日最高気温15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上かつ降雨直後の日。

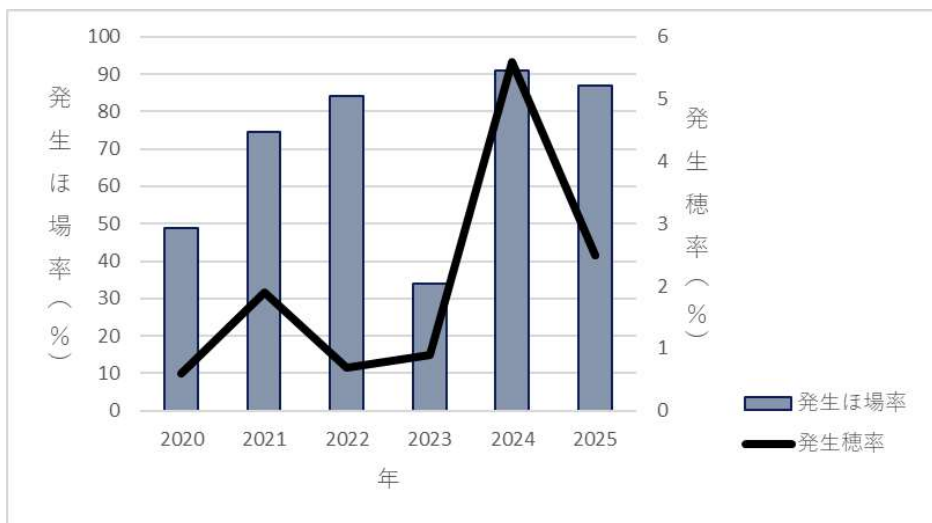


図 小麦・六条大麦の赤かび病発生ほ場率及び穂率（5月中旬）

表1 赤かび病の子のう胞子飛散好適日

5月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	合計
令和6（2024）年	○	○				○	○					○	○	○	○	○	○		○	11日
令和7（2025）年		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	15日

○：赤かび病の子のう胞子飛散好適日

4 防除対策

赤かび病の病原菌は、人や家畜に有害なかび毒（デオキシニバレノール（DON）、ニバレノール（NIV）等）を産生するため、赤かび粒の混入した麦は販売できない。このため、早急に防除を行う必要がある。

- (1) 薬剤を散布する際は、収穫前日数及び使用回数に留意する。特に、収穫期が迫っているほ場では注意する。
- (2) 薬剤耐性菌の発生を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (3) 散布直後の降雨は防除効果が低下するため、降雨予想に留意し散布する。
- (4) 収穫の遅れは、かび毒の産生を助長する原因となるため、適期収穫を基本とする。緊急的に高水分で収穫した場合は、速やかに乾燥機へ張り込み、通常より低めの温度から乾燥を開始する。
- (5) 収穫時は赤かび病被害粒の混入防止に努め、立毛中に発生が確認された麦は刈り分けし、共乾施設等へ搬入する前に赤かび病被害粒の混入が無いことをよく確認する。

表2 小麦または麦類の赤かび病に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年5月14日現在）

農薬名	作物名	希釈倍数	使用方法	使用時期／本剤の使用回数	薬剤系統名	FRACコード
シルバキュアフロアブル	小麦	2000倍	散布	収穫7日前まで／2回以内	DMI剤	3
ワークアップフロアブル	麦類	2000～3000倍	散布	収穫7日前まで／3回以内		
チルト乳剤25	小麦	1000～2000倍	散布	収穫3日前まで／3回以内		
ミラビスフロアブル	小麦	1500～2000倍	散布	収穫7日前まで／2回以内	SDHI剤	7
トップジンMゾル	小麦	8倍	無人航空機による散布	収穫14日前まで／出穂期以降は2回以内	MBC	1

※詳細は、「栃木県農作物等病害虫雑草防除指針」を参照。

<https://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/tochigi>



写真1 小麦の発病状況



写真2 六条大麦の発病状況

詳細は、農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せ下さい。病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます



令和7（2025）年度 病害虫発生予察注意報 第2号

令和7（2025）年7月8日
栃木県農業総合研究センター

作物名 水稻

病害虫名 イネカメムシ

- 1 発生予想 発生量 多い
- 2 発生地域 県南部

3 注意報発表の根拠

- (1) 県内の乾式予察灯4基（大田原市、宇都宮市、栃木市、小山市）のうち、県南部の小山市においては、6月下旬から誘殺数が増加し、7月第1半旬には15頭と急激に増加した（図1）。
- (2) イネカメムシが多発した令和6（2024）年と比較して、急増する時期が約2か月早い（図1）。
- (3) 県南部の複数の水稻ほ場で、昨年まで確認されなかった出穂前からのほ場への侵入が確認された。
- (4) 気象庁の1か月予報（7月3日発表）によると、向こう1か月の平均気温は高く、降水量も平年並か少ない見込みであるため、本種の活動がより活発化したり、第1世代以降の発育が早まるおそれがある。

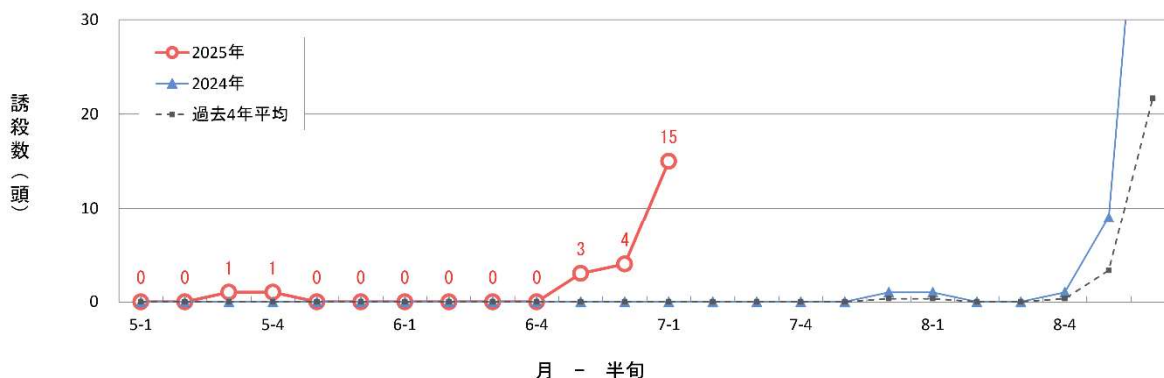


表1 水稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年6月30日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	IRAC コード
スミチオン乳剤	1000倍	収穫21日前まで	2回以内	MEP	有機リン系	1B
キラップフロアブル	1000～2000倍	収穫14日前まで	2回以内	エチプロール	フェニルピラゾール	2B
トレボンEW	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	エトフェンプロックス	ピレスロイド	3A
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	ジノテフラン	ネオニコチノイド	4A
エクシードフロアブル	2000倍	収穫7日前まで	3回以内	スルホキサフロル	スルホキシイミン	4C

注1 IRACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

注2 詳細は、「[栃木県農作物等病害虫雑草防除指針](#)」を参照。

5 蜜蜂被害軽減対策

- (1) 斑点米カメムシ類に対する薬剤防除は、水田周辺のミツバチに影響を及ぼす可能性があるため、地域の養蜂家に薬剤防除日を事前に周知する等の積極的な対応を行う。
- (2) ミツバチの活動が最も盛んな時間帯（午前8時～12時）を避け、可能な限り早朝又は夕方に農薬散布を行う。
- (3) 詳細は、「[蜜蜂被害軽減対策の推進について（農林水産省）](#)」を参照。



写真1 イネカメムシ成虫

（左 稲穂上の成虫 真中 セイバンモロコシ上 右 メヒシバ上）



写真2 イネカメムシ幼虫

（左 稲穂上 右 メヒシバ上）



写真3 基部斑点米

詳細は、栃木県農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課
（Tel 028-665-1244）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「[栃木県農政部 X](#)」、
「[農業総合研究センターホームページ](#)」でご覧いただけます。
また、「[カメムシ防除作戦ホームページ](#)」、「[栃木県農業防災 LINE](#)」
でも情報を発信しています。



【センターHP】

作物名 水稻

病害虫名 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ、イネホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ）

1 発生予想 発生量 多い

2 発生地域 県全域

3 注意報発表の根拠

- (1) 県内 44 か所で実施した雑草地等における斑点米カメムシ類すくい取り調査の結果、斑点米カメムシ類の捕獲頭数は平年値の約2倍以上と多かった（表1）。
- (2) カメムシ類の種類・地域別の捕獲頭数（詳細データは省略）は、斑点米に大きな影響を及ぼすクモヘリカメムシ、ホソハリカメムシは県北中部でやや多い～多く、イネカメムシは県中南部で多い。なお、これまでこの時期には発生が認められなかったミナミアオカメムシが、県南部で捕獲された。
- (3) 気象庁の1か月予報（7月10日発表）によると、向こう1か月の平均気温は高い見込みであり、斑点米カメムシ類の活動や増殖に好適な条件である。

表1 雑草地等における斑点米カメムシ類のすくい取り調査結果

種名	本年値 ^{※1}	平年値 ^{※2}	平年比（%） ^{※3}
クモヘリカメムシ	48.34	21.35	226
ホソハリカメムシ	8.32	4.08	204
イネカメムシ	0.57	0.02	3,750
ミナミアオカメムシ	0.16	0	-
カスミカメ類 ^{※4}	543.91	256.39	212
斑点米カメムシ類	605.98	286.39	212

※1 県内全44か所の捕獲頭数の平均値（20回振り/か所）。調査期間は7月7～9日。

※2 10か年の平均値（平成27（2015）年～令和6（2024）年）。イネカメムシ、ミナミアオカメムシは4年間の平年値（令和3（2021）年～令和6（2024）年）。

※3 平年比（%）＝本年値/平年値×100。

※4 カスミカメ類は、イネホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメの2種。

4 防除対策

- (1) 農政部経営技術課の[水稻の生育診断速報](#)（7月10日発表）によると、早植コシヒカリの出穂期は県平均で7月21日と前年より早い見込みであるため、適切な時期に防除する。
- (2) 斑点米の発生を抑制するため、出穂期7～10日後頃（穂ぞろい期～乳熟初期）に液剤で防除する（表2）。その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。なお、イネカメムシの発生地域では、[令和7（2025）年度病害虫発生予察注意報第2号](#)を参考に、不稔を抑制するため出穂期に液剤による防除を行う。
- (3) 周辺より出穂が早い、または遅い品種・作型では、被害が集中しやすいため防除を徹底する。
- (4) 斑点米カメムシ類の誘引源となる水田内のイネ科雑草、ホタルイ等を防除する。

5 留意事項

- (1) [令和7（2025）年度病害虫発生予察注意報第2号](#)（7月8日発表）は県南部のイネカメムシを対象としたが、本報は、県全域の斑点米カメムシ類を対象とした情報である。

表2 稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年6月30日現在）

IRAC コード	農薬名	使用方法	希釈倍数 又は使用 量	使用時期	本剤の 使用回数	成分
1B	スミチオン乳剤	散布	1000倍	収穫21日前まで	2回以内	MEP
2B	キラップフロアブル	散布	1000～ 2000倍	収穫14日前まで	2回以内	エチプロール
		無人ヘリコプターによる散布	8～16倍			
3A	トレボンEW	散布	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	エトフェンブロックス
	トレボンエア	無人航空機による散布	8倍	収穫14日前まで	3回以内	エトフェンブロックス
4A	スタークル液剤10	散布	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	ジノテフラン
		無人航空機による散布	8倍			
4C	エクシードフロアブル	散布	2000倍	収穫7日前まで	3回以内	スルホキサフロル
		無人航空機による散布	16倍			

注1 IRACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

注2 詳細は、「[栃木県農作物等病害虫雑草防除指針](#)」を参照。

6 蜜蜂被害軽減対策

- (1) 斑点米カメムシ類に対する薬剤防除は、水田周辺のミツバチに影響を及ぼす可能性がある。地域の養蜂家に薬剤防除日を事前に周知する等の積極的な対応を行う。
- (2) ミツバチの活動が最も盛んな時間帯（午前8時～12時）を避け、可能な限り早朝又は夕方に農薬散布を行う。
- (3) 詳細は、「[蜜蜂被害軽減対策の推進について（農林水産省）](#)」を参照。

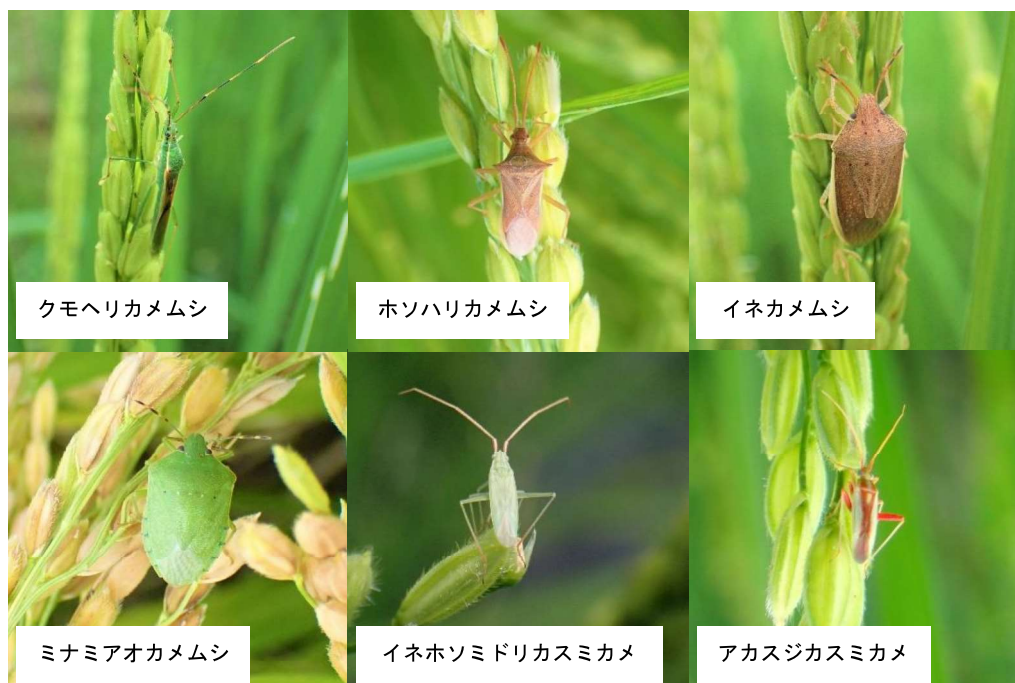


写真 栃木県で主要な斑点米カメムシ類

詳細は、栃木県農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課
（Tel. 028-665-1244）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「[栃木県農政部](#)」、
「[農業総合研究センターホームページ](#)」でご覧いただけます。

また、「[カメムシ防除作戦ホームページ](#)」、「[栃木県農業防災LINE](#)」
でも情報を発信しています。



【センターHP】



作物名 **ねぎ、だいず、その他野菜類、花き類**

病害虫名 **シロイチモジヨトウ**

1 発生予想 発生量 **多い**

2 発生地域 **県内全域**

3 注意報発表の根拠

- (1) シロイチモジヨトウ幼虫の発生は、8月上旬に県内8か所で行ったねぎの巡回調査の結果、過去5年間で最も多かった(発生ほ場率50%(年平均値5%)、寄生株率3.3%(年平均値0.1%))。また、8月上中旬に県内27か所で行っただいずの巡回調査の結果においても、過去9年間で最も多かった(発生ほ場率3.7%(年平均値0.4%)、発生密度0.2頭(年平均値0.0頭))。
- (2) シロイチモジヨトウ成虫の発生は、県内2か所に設置したフェロモントラップの調査の結果、両地点で7月末頃から増加した(図1)。
- (3) 気象庁の1か月予報(8月21日発表)によると、向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない見込みであり、シロイチモジヨトウの増殖や活動に好適な条件である。

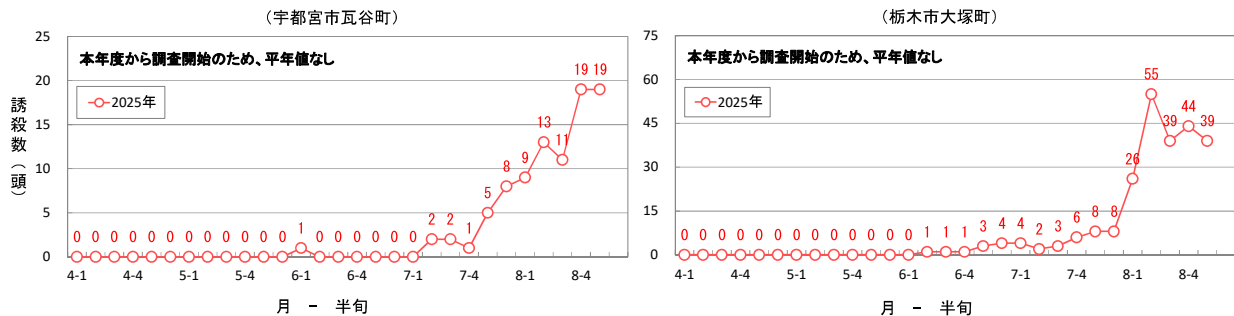


図1 シロイチモジヨトウ成虫のフェロモントラップによる誘殺数推移

4 防除対策

- (1) ほ場周辺の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。
- (2) 施設栽培では、開口部に防虫ネット(4mm目合い以下)を設置し、成虫の侵入を防止する。
- (3) 被害葉及び収穫残さは発生源となるため、一か所にまとめて表面をビニルで被覆する等、適切に処分する。
- (4) 幼虫の齢期が進むと薬剤の防除効果が低下するため、定期的にはほ場を巡回し、若齢期での早期発見・早期防除を徹底する(薬剤については、[栃木県農作物等病害虫雑草防除指針](#)を参照)。卵塊や分散前の幼虫は見つけ次第捕殺する。
- (5) 薬剤の葉への付着と浸透性を高めるため、機能性展着剤を活用する。薬害の発生を避けるため、使用方法をよく確認して適切に使用する。
- (6) 定植直後に食害を受けると生育が停滞し被害が大きくなるため、登録のある灌注剤や粒剤を定植時に使用する。
- (7) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

5 生態と形態的特徴

- (1) ねぎ、にら、たまねぎ等のネギ属作物を好む。その他にもいちご、キャベツ、はくさい、レタス、ほうれんそう等の野菜類、だいず等の豆類、花き類も加害する。
- (2) 卵は卵塊で産み付けられ、卵塊の表面はハスモンヨトウと同様に鱗毛で覆われる(写真1)。
- (3) ふ化直後の幼虫は集団で食害する(写真1)が、成長に伴い、付近の株に分散する。
- (4) 中・老齢幼虫は体側に白帯とピンク色の斑点を持つ個体が多い(写真2、3)。
- (5) ねぎでは、若齢幼虫は葉の表面を舐めるように食害する(写真4)。成長に伴い葉身内部に食入して内部から表皮を残して食害するため、葉が白化する(写真5、6)。また、虫ふんが葉身内の底部に堆積するため、商品価値が損なわれる。



写真1 卵塊とふ化幼虫 (にら)



写真2 中齢幼虫 (レタス)



写真3 老齢幼虫 (ねぎ)



写真4 葉表面を食害する若齢幼虫 (ねぎ)



写真5 白化した葉 (ねぎ)



写真6 白化した葉 (ねぎ)

詳細は、栃木県農業総合研究センター環境技術指導部防除課 (Tel 028-665-1244) までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X (@tochigi_nousei)」、
農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>)
でもご覧いただけます。





令和7（2025）年度病害虫発生予察特殊報第1号

令和7（2025）年8月15日
栃木県農業総合研究センター

チュウゴクアミガサハゴロモの発生について

- 1 病害虫名 チュウゴクアミガサハゴロモ *Ricania shantungensis* (Chou & Lu, 1977)
- 2 対象作物 ぶどう及びなし
- 3 発生経過
 - (1) 令和7（2025）年7月7日、県北東部のぶどう（露地栽培）ほ場において、ハゴロモ類の成虫・幼虫及び枝への産卵が確認された。栃木県立博物館に成虫の同定を依頼した結果、チュウゴクアミガサハゴロモであることが判明した。また、同年7月25日、県南部のなしほ場においても、成虫及び枝への産卵が確認された。
 - (2) 本種は中国原産であり、海外では平成22（2010）年以降、韓国、トルコ、フランス、ドイツ及びイタリアに分布が拡大している。国内では平成29（2017）年に大阪府で初めて確認されて以降、関東以西の本州、四国及び九州の各地で発生が報告されている。
 - (3) 農作物への加害については、令和6（2024）年に神奈川県、埼玉県、福岡県及び山梨県から、令和7（2025）年に東京都、群馬県、熊本県、富山県、千葉県、大阪府及び奈良県から特殊報が発出されており、本県で12都府県目である。
- 4 形態
 - (1) 成虫の体長は14～16mm程度。前翅は茶褐色～鉄さび色。前翅前縁中央部に三角形の白斑が存在する（写真1、3、4）。
 - (2) 幼虫は白色。腹部から白い糸状の蠟物質の毛束を広げる。
 - (3) 産卵痕は白い毛状の蠟物質で被覆される（写真2）。
- 5 生態
 - (1) 本種は極めて広食性であり、農作物では、チャ、ナシ、リンゴ、ウメ、モモ、スモモ、オウトウ、ブドウ、カンキツ、カキ、クリ、イチジク、ブルーベリー、オリーブ、キウイフルーツ等への加害が報告されている。
 - (2) 国内における年間発生世代数など、生態は不明な点が多い。
- 6 被害
 - (1) 成虫、幼虫ともに集団で枝を吸汁し、多発生時には排泄物によりすす病を引き起こす。
 - (2) 成虫は枝皮を剥いで産卵するため、枝が損傷し、伸長抑制や枯死を引き起こす。
- 7 防除対策
 - (1) 令和7（2025）年8月6日現在、本種に対して登録のある薬剤はない。
 - (2) 成虫、幼虫は見つけ次第捕殺する。産卵された枝は直ちに摘除し、土中深くへの埋設、または袋に密閉したうえでの処分など、適切に処理する。
 - (3) 本種は広食性のため、農作物だけではなく、庭木等も観察し、寄生を確認した場合は（2）のとおり対処する。



写真1
ぶどうに寄生する
チュウゴクアミガサハゴロモ成虫

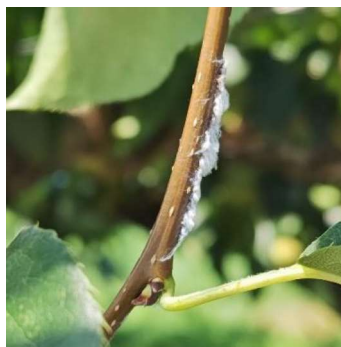


写真2
なし枝上の産卵痕



写真3
チュウゴクアミガサハゴロモ (左)
と在来のアミガサハゴロモ (右)

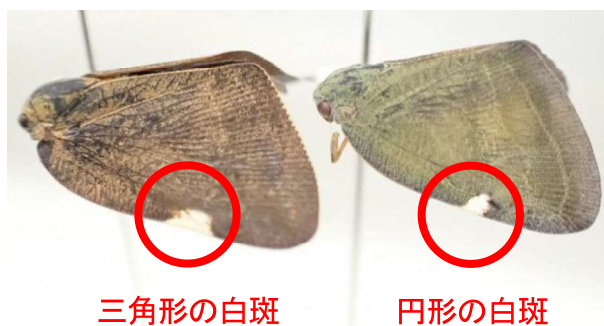


写真4
チュウゴクアミガサハゴロモ (左)
と在来のアミガサハゴロモ (右) の模様比較

詳細は、環境技術部防除課 (Tel.028-665-1244) までお問合せ下さい。
病害虫情報発表のお知らせは「[農業総合研究センターホームページ](#)」、[「栃木県農政部 X」](#)でご覧いただけます。



【センターHP】

トマト青かび病の発生について

1 病原菌名 *Penicillium oxalicum* (Currie et Thom)

2 発生作物名 トマト

3 発生経過

- (1) 令和7（2025）年10月、栃木県内の施設栽培のトマト（品種：かれん）において、青緑色のかびが表生し、茎が激しく腐敗する病害が確認された。罹病茎から菌を分離し、ITS領域の塩基配列を解析したところ、トマト青かび病の病原である *Penicillium oxalicum* と一致した。
- (2) 本病は、平成18（2006）年に千葉県で発生が確認されている。

4 病徴

- (1) 芽かきや葉かき後の傷口から褐変・枯死が始まり、その後、症状は主茎に進展する。主茎に暗褐色の病斑（写真1）が形成され、病斑上には青緑色の分生子（写真3）が密生し、腐敗する。
- (2) 病斑が拡大すると内部組織まで褐変し、植物体は萎れやすくなる。
- (3) 罹病茎近くの葉にはクロロシス（写真2）が生じ、黄白色のかすれ状斑点が認められる。

5 防除対策

- (1) 施設内の湿度管理と換気を徹底し、過湿を避ける。
- (2) 発生ほ場で使用した各種資材は、資材消毒剤等での消毒を徹底する。
- (3) 発病株は見つけしだい抜き取り、肥料袋等に詰めて空気を排出し、口をしっかりと閉じる。その後、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理後に処分する。
- (4) 令和7（2025）年12月10日現在、本病に対して登録のある薬剤はないため、上記の耕種的防除を徹底する。

6 引用文献

小板橋（2011）：微探収報24，71-74.



写真1 茎に暗褐色の病斑



写真2 葉にクロロシス状の斑点

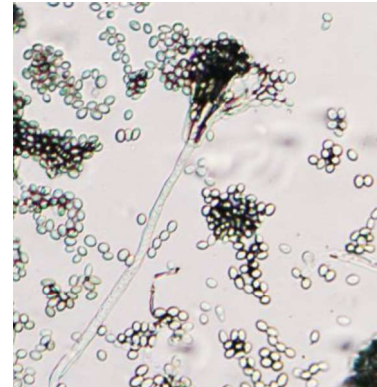


写真3 分生子

詳細は、環境技術指導部防除課（Tel.028-665-1244）までお問合せ下さい。
病害虫情報発表のお知らせは「[農業総合研究センターホームページ](#)」、「[栃木県農政部](#)」をご覧ください。

